

沖縄研修について

【発端】

沖縄で研修をしたそもその理由は、代表の前原土武が沖縄出身のウチナンチュであるということ。（災害 NGO 結の「結」も沖縄の言葉、ゆいまーるが語源です）

社会問題のデパートとも言われる沖縄には、災害がなくともいろいろな社会課題が存在しています。

その大きな原因の一つは、76年前の沖縄で繰り広げられた地上戦です。

2018年の2月に沖縄へ戻ったときに、ひめゆり資料館などを見学しました。そこでウチナンチュとしてだけでなく現代の日本人として沖縄の課題を知るべきことだなと感じていました。

そして、2021年の2月に、“激戦地であった県南部の土砂、戦没者の骨や遺品などが混じっているかもしれない土砂を辺野古の埋め立てに使わないでほしい”という訴えが起こっていることを知りました。

しかし、この件を身の周りの人に話しても、あまりピンときてもらえなかった。そもそも沖縄戦のことをよく知られていないことが多いと分かりました。

今もなおいろいろな形で課題が進行しているからこそ、現地で過去に何が起きたかを振り返り、今後のことを一緒に考えてほしいと思いました。

そんな思いからの研修実施でした。

【研修を始めるにあたって】

研修実施の前提として、コロナ禍でもあるので、持ち込まない・広げないことを最優先しました。

参加者には、沖縄到着時に抗原検査を実施、陰性が確認できてからの参加に。

参加後にも検査を実施しています。

宿泊場所はライフラインが使える空き家泊と、知人の敷地にテント泊としました。





また今回は災害NGO結の活動と位置づけ、いろいろな点を考慮して災害NGO結の経費は使っていません。

今回の研修内容はこちら

- 1 日目：平和祈念公園とひめゆり資料館、ガマを訪問（県南部糸満市）
- 2 日目：普天間基地の近くと辺野古漁港を見学。北部の高江ヘリパッド建設問題当事者からの話を伺う（宜野湾市、名護市、恩納村）

1 日目

1 日目は、普段は修学旅行のガイドなども務めている、ガイドの M さんに同行してもらいました。

（実は M さん、もともとは兵庫県にお住まいで、26 年前の阪神淡路での被災をキッカケに沖縄へ避難、そのまま移住された方でした。）

この日のスケジュールはこちら

平和祈念公園資料館の展示→展望台→平和の礎→各県の慰霊碑→沖縄師範健児の塔→ひめゆり資料館→魂魄の塔→熊野鉦山→ガマ

【平和祈念公園】

糸満市にある平和祈念公園に集合。



普段は修学旅行生などが多いようですが、コロナの影響もあり、1つのグループをのぞいて他の来訪者はほとんどいませんでした。



資料館の入り口にある不発弾の展示。現在も不発弾が各地で発見されることがあります。そのため、沖縄では建設前には地中の金属探知が必須だそうです。

しかし近年でも、探知が十分でなく工事中に爆発して負傷者が出たという事故があったとか。

平和祈念公園の資料館で、沖縄戦の概要ビデオなどを見て、基本をおさえたあと、展望台へ。

あたりが見渡せる場所でした。「開発のために削られて茶色く土が見えている場所が沢山あるのでぜひ見てほしい」とガイド M さん。

ぐると陸地側に目を向けると、確かに砂山がある場所がポツポツと確認できます。

実は世界で最も海岸線を開発されている地域の一つである沖縄。代表住所としている糸満市西崎も、那覇空港も、埋立地です。

(港や空港が埋立地に立地しているため、地震があれば液状化して使用不可。米軍嘉手納基地の滑走路を使わせてもらうしかないのでは、という話も聞きました)

経済発展のために開発を進めなければいけない点、自然の海岸線が失われる点、埋め立てに使われる土砂の問題、いろいろな課題が見えるなど感じました。



続いて平和の礎へ。

たくさんの碑に、沖縄戦で犠牲になった人の名前が刻まれています。沖縄の人、日本軍として全国各地から来た人だけでなく、連合軍である米軍や諸外国の兵士の名前も刻まれています。

自国の犠牲者だけでなく、当時敵対国であった犠牲者の名前も一緒に記されているところは珍しいそうです。

キャンプ・シュワブやキャンプ・ハンセンなど、沖縄にある米軍基地の名前の由来となった人たちの名前もあります。命名の由来となったということは、“戦いで功績をあげた”ということ。そうした人たちも(場所は区切られているとはいえ)一緒に記載されているのは、確かに奇妙な印象もあります。

ガイド M さんは、そんな話をしながらある名前を見せてくれました。

基本的にフルネームで彫られているのですが、中には〇〇〇〇の次女、などという表記。家族が全員犠牲になってしまったりすると、名前も分からなくなってしまう。4人に1人が犠牲になった沖縄戦、という事実を目で見ることができるとのことでした。



平和の礎から歩いて階段を登って、摩文仁の丘へ。摩文仁の丘は、陸軍が最後の拠点となった場所です。

この丘には、沖縄戦で犠牲になった兵士などの慰霊碑が、その出身地ごとに設置されています(47都道府県全部がここにあるわけではない)

県によって、県知事の名前で設置されたり、遺族会の名前だったり。慰霊碑に刻まれた文言にも違いが見て取れます。



丘を登った一番奥には、陸軍の司令官だった牛島満の石碑もあります。彼の石碑が、摩文仁の丘の一番奥、一番高い場所にあるのも、なんだか考えさせられます。

そのまま引き返さずに、海側に降りていく階段を下ります。

日本軍が最後に使用していたガマの入り口を見ながら、更に下り、沖縄師範健児の塔へ。

ひめゆり、として女学生の戦争体験が語り継がれていますが、もちろん男子生徒も戦に巻き込まれています。健児の塔は、沖縄師範学校から動員されて犠牲になった生徒が祀られています。当時の沖縄師範学校の学生といえば、エリートだったそうです。そんな若い沖縄のエリートたちがたくさん犠牲になったしまったことは、沖縄の戦後復興に大きな影響を与えたはずです。



こうしてぐるっと平和祈念公園をまわりました。

資料館以外は、入場料なしで見学できます。他の慰霊塔などには足を運ばませんでした。全部をじっくり見学するには丸一日以上掛かりそうです。

その後はひめゆりへ。

実は、ひめゆり資料館は、その日から展示内容をリニューアルしていました。

ひめゆり資料館は、以前から語り部の育成や、伝承について真剣に検討されているようです。ひめゆり学徒隊として、当時の体験をしたおばあたちも高齢になっています。今後どうやって語り継ぐか、という点を大きく反映させたリニューアルだそうです。

2年前に来たときよりも、明るい雰囲気。写真や沖縄戦についての説明が、柔らかいイラストと、ひめゆり学校の生活を詳しくまとめたものに変わっていた気がします。

平和祈念公園の資料館が、沖縄戦の総合的な説明だとしたら、ひめゆり資料館は、少女たちがどうやって戦火に巻き込まれ、どんな体験をしたのかを一つひとつ追いかけるような構成だと感じました。



ガマでの体験、重症兵の手術中、友達が亡くなった話、自決しようと思った時の話など、それぞれ 1 分ちょっとで語られる映像が流れる画面の前では、みんな立ち止まってしまいました。

おばあちが淡々と話してくれる動画が進むごとに、内容は戦火がせまり苦しい状況に追い込まれていきます。

全体のコンセプトも、一つひとつの証言が残すメッセージも、風化させないという意志を感じるものでした。

一つひとつをじっくり見ていくと資料館を出る時にはぐったりしてしまうのですが、沖縄戦を学ぶ上で避けてはいけな施設かもしれません。



都道府県ごとにたてられた慰霊碑ですが、実は46都道府県分しかありません。沖縄県としての慰霊碑はなく、その代わりとなっている慰霊碑が魂魄の塔でそうです。

各県のものよりも素朴な作りという印象の碑でした。

それは、終戦後、最も早くつくられた慰霊碑の一つだからかもしれません。

米軍収容所から戻ってきても、軍の管理化にある土地では生活再建が出来ないという課題がありました。代用地として糸満市の一部の土地を与えられましたが、激戦区であったそこは、あちこちに戦没者の遺骨が散乱し、戦後復興するには程遠い状況だったそうです。そんな状態から収骨して集めたのが納骨所の始まりとなり、のちに魂魄の塔として石碑がつけられました。

状況が落ち着いてきて県の納骨所に集約された後も、沖縄戦の終戦記念日の6月23日には県内外から沢山の人がうとーとー(お祈り)しに訪れるそうです。



魂魄の塔から歩いて3分の場所にある、熊野鉦山の跡地。

ここが今回の研修の発端ともなった、戦没者の遺骨収集が現在も進められているところの一つです。ここが土砂採掘場所として工事が進められてしまったと

ころから、ここの遺骨収集をされていたボランティア団体がマフヤーの具志堅さんがハリストに踏み切り、議論が大きく広がりました。

戦没者遺骨収集推進法では、遺骨収集が国の責務だと定められている一方で、現在も工事が進められています。



そこから少し移動して大きなガマへ。

ガイド M さんに、みなさんの体力を見ながらどのガマに行くかを決めます、と
いっていただいていたのですが「一番ヘビー」なガマに案内していただきました。

事前に全員持ってきたヘッドライト装着。

入り口から別世界のような空間で、ひんやりと涼しい。

階段の横にあるちょっと心もとないロープを頼りに一人ずつ奥へ奥へ。



狭い入り口の先にも、空間は広がっていて立派な鍾乳洞になっていました。

頭と足元に気をつけながら、どんどん先に。左手に岩肌がむき出しの斜面があり、右手からは水の音。川が流れていて、大雨が降ると海からの逆流で天井まで水に浸かってしまうような場所だそうです。

一番奥は海に続く川に。ところどころ湿地のように湿っていました。

ここに当時たくさんの住民と日本軍が暮らしていたそうです。6月25日の米軍からの投降を命令されて出てきた人数は、約600人。これには、米軍も驚いたそうです。

しかし狭いゴツゴツした空間です。証言をもとに書かれた当時の絵を見ると、まるで満員電車のような感じだといいます。

途中からは日本軍にガマとの出入りを禁じられ、ぎゅうぎゅうになりながら息

をひそめて暮らしていたのでしょうか。

完全に外からの光が入らないので、中は真っ暗。

持っていたヘッドライトを全部消すと、目を開けているのか閉じているのかが分からなくなる暗闇です。

ガイド M さんが話してくれたのは、9ヶ月の赤ちゃんを背負って逃げてきて、



どうにかこのガマにたどり着いたある女性のお話。

過酷な状況で衰弱た赤ちゃんは、ガマについてから息絶えたそうです。冷たくなって悪臭が漂ってきて、とうとうお別れをしなくてははいけない。

お母さんは最後にどうしてもひと目、赤ちゃんの顔を見たかったのですが、真っ暗な暗闇ではそれは叶いません。外に出ることもできず、お母さんはその手で何度も何度も赤ちゃんの顔をなぞり、手で顔を覚えたといえます。

今でも手で覚えているのよ、とガイド M さんにお話くださったと。

もう一つ、このガマにいて生き延びた女性から聞いたお話。

みんなで方を寄せ合ってじっとしていると、近くで話し声が聞こえたそうです。おばあとお小さい男の子の喋り声。どうやら、おなかがすいたとぐずる坊やをおばあがなだめているようでした。しかし、我慢の限界が来たのか、男の子が泣

き出してしまいます。そうすると、日本兵が来て、坊やを黙らせるように注意されてしまいました。打つ手がないおばあは、仕方なく大事に取っておいた黒糖を坊やにあげました。その場は泣きやみましたが、またおなかがすいてぐずる坊や。鳴き声を聞いて再びやってきた日本兵とやり取りをしていたら、黒糖を持っていることがバレてしまったそうです。そして黒糖を取り上げられてしまった。

「それは僕の黒糖だ！返せ！」と坊やが怒って泣き叫ぶ声が響いた時、ズドンと大きな音がしたそうです。それきり、坊やの声は聞こえなくなったそうです。

その他にも、たくさんの悲しい証言があるそうです。

人間が人間として尊重しあえないような状況が、このガマで、沖縄で、もちろん日本の各地で起きていた。

こうして、息をするのを忘れるぐらいの、ヘビーな1日目を終えました。

2日目

2日目は、ガイドさんの同行はなしで、結グループだけで見学。

この日は、普天間飛行場が見える嘉数展望台→辺野古漁港→多幸の山学校で高江ヘリパッド問題のお話会という工程でした。

日本軍の攻撃拠点となったトーチカと呼ばれた場所の近くに、平和を願って地球儀の形をした3階建ての展望台が嘉数展望台です。3階まで登ると、普天間基地の飛行場が見えます。

ジャーナリストかカメラマンが無線を持ちながら待機していました。何かスクープがあったときに売り込むのでしょうか。どっちにしても、張っていれば収穫のある場所なんではないでしょうか。



ちょうど3階にみんなが上がった時に、一台のオスプレイが飛び立ちました。北に向かったかと思ったら、街の上を旋回してどこかに消えていきました。近くであんなに大きな航空機が飛んでいるのは、やっぱり沖縄だからでしょうか。



近くの小学校の校庭には、コンクリートで作られたシェルターがあるそうです。2017年の米軍ヘリの窓が落ちてきた事に対する対策です。『(米軍機の)音を聞いて、止まって、目視、怖いと思ったら逃げましょう』と小学校で教えられているようです。

<https://mainichi.jp/articles/20201211/k00/00m/040/312000c>

那覇市内でも、轟音をたてながら飛ぶ戦闘機のような影にビックリしました。でも周囲を歩く人達は気にする様子もないことに、さらにビックリしました。移動中、車の中から見る両側のフェンス(米軍基地)も、見慣れないと思うし、ローマ字ナンバーの車を見ても沖縄に居ることを感じさせられます。基地が沖縄の日常に溶け込んでいるということなんではないでしょうか。

午後は辺野古漁港へ。

穏やかな町中にある漁港、たくさんの船が岸に並んでいました。誰も居なくて、あおい海で、素敵なロケーションですが、砂浜の左側はフェンスで区切られています。

2年前来たときは、遠くにはほとんど何も見えなかったのですが、今回はテトラポットが何段にも積み上げられているのが目視で見えてしまいました。



ちょうどコロナの感染者が増えてきていたタイミングでもあったので、ゲート前の座り込みは中止になったそうです。

それでも埋め立て工事は進み、業者は土砂を搬入しています。

被災地でもですが、不要不急ってなんだろうか、とってしまいます。

誰も居ない浜辺でしたが、フェンスの向こうに一人だけ、顔が分からない様にサングラスとマスクをした警備員さんがいました。

ずっとお一人で警備をされているのでしょうか。

浜辺に〇〇人、フェンス越しにカメラを構えている人が一人、と報告されていたようです。



辺野古を後にして、南下して恩納村へ。

トムさんの知り合いの方に調整してもらい、高江村のヘリパッド建設問題の当事者からお話を聞く機会をいただきました。



高江地区は、沖縄本島の北部に位置する東村の一部。そこにある米軍基地の敷地内にヘリパッド建設が決定し、それに対して近隣住民が反対しているという課題です。

住民として反対していた方たちが、工事の妨害をしたと国から訴えられるという事態にも発展しました。ちなみに国がこうした問題で個人を訴えることをスラップ裁判と呼び、諸外国では禁止されています。

お話ししてくれた彼だけでなく、抗議の現場にはいなかった小学生の娘さんまで告訴の対象となってしまったそうです。

県民同士の温度差、地元住民の中の考えの違い、さまざまなバッシングや非難。

活動すること事態に疲れてしまって、最近は少しそうした動きから離れていたんだ、とポツリポツリと心境をお話くださる姿に、ショックを受けもしました。1日目のガイド M さんのお話とは違い、未だ現在進行系で進む課題と、それに向き合い続けて消耗してしまった姿だと感じたからです。

現在にまで続いている課題を知って、その当事者の声を聞いて、ウチナンチュの意見を聞いて。

最後はみんなで音楽を楽しんで研修が終了しました。



この2日間の参加者の感想

- ・知ってはいたが詳しくは知らないことだった。避けていたのかも。
- ・沖縄ものことも、住んでいる長崎の原爆の話も、継いでいく事の意義を感じた。
- ・ひめゆりでの生々しい証言の大切さと、証言者の勇気によって伝えられていることを感じた。
- ・無謀な戦争をやったという衝撃がいまだにある。
- ・研修後、沖縄に関する報道を聞いても以前とは感じるものが違った。
- ・ガマでは、自分の中でセーブしなければ苦しくなるほどだった。
- ・中学生の時以来の沖縄平和学習で、大人になって感じるものは多かった。
- ・無知だったなと感じた。実際に今回沖縄で知れてよかった。
- ・きつかった。こんなに悲惨なことが起きたにも関わらず、今も世界で戦争が起きていることに悲しい気持ち。
- ・アメリカの基地問題において、沖縄人对沖縄人の構図になっているのがつらい。
- ・なぜきれいな海を埋め立てる？なぜ激戦地の土を使う？倫理的にあり得ないような内容。どこか他人事のように決められたのではとも思う。
- ・日常的に戦闘機が飛び交うことや、騒音を初めて肌で感じた。
- ・辺野古の静けさと着々と進む異様さ。
- ・日常になっているかもしれない沖縄の若い人たちはどう考えているのだろう。

日常になり、関心や実感がなくなると、また繰り返されてしまうのではないかと。

- ・「怒りは疲れる」が印象的な言葉。楽しさとともに伝えていくことの大切さと難しさを感じた。

- ・歌いながら楽しむかたちで沖縄の人たちと関わる時間もすごくよかった。

- ・何をどうしていいのだろう。山ほど知って、感じてだけけれども、どうしたらいいのだろう

今回は初めての試みでもあったので、広く募集もせずに試験的な少数人数での開催としました。

感想にもあったように、今まで知る機会がなかったような課題にも触れるチャンスになったと感じています。

日本の一部の沖縄として、今後もたくさんの人に知ってもらい、考えてもらいたい問題です。

被災地の課題もそうですが、やはり現地に来て見て感じて触れて、何が課題かを自分で考えることが一番。

コロナウイルスにまつわる状況など、もっといろいろなことが落ち着いたら、スタディーツアーのような形に作り込んで、みなさんと考えたいなとも思っています。

その時はぜひ、いろいろな形でご参加ください。